

横浜市立 六つ川台小学校 学校評価報告書 (令和元～3年度)

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにするとともに、スキル学習の充実を図り、基礎基本の定着を目指す。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」読書活動を啓発し、語感を高め、自己を豊かに表現できる子を育成する。	○基礎・基本の定着に向けてスキルタイム学習を進めた。内容の充実が求められる。○新学校教育目標の実現に向けた「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」のイメージを共有し、授業研究会を通して検証することができた。	B
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ運動を通して、気持ちのよい挨拶や、礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心をもつ子を育成する。③人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。	○児童のアンケート結果から、自己肯定感を一層高める指導の充実が求められる。○あいさつ運動では、中学校を招く日も設定し、継続的に取り組んだ。○人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努めた。	B
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を通じて、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会での清掃についての活動を通して、生活環境に対する関心を高め、清潔な環境で生活するよさを実感できる子の育成を図る。	○体カアッププロジェクトでの長編1000回チャレンジが4年目を迎え、冬季に運動に親しむ環境ができた。夏季の環境づくりが課題である。○学校保健委員会を全校参加とし、清掃指導の充実を図った。定着に向けての取り組みに課題が残った。	B
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、校内支援体制を整え、配慮の必要な児童に対する共通理解を図る。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。	○コーディネーターを中心に校内研修を行った。また児童の困り感について共通理解を図り、保護者とともに個別の支援計画を作成し、算数科の取り出し指導を行った。○学習環境のユニバーサルデザイン化に努めた。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。	○日常指導から児童の実態を把握し、家庭訪問や個人面談を通して保護者への理解を求めるとともに、学年末にスタンダードの加筆・修正を全職員で行った。○児童理解委員会を毎月開催し、児童間の問題や気になる児童についての情報を共有した。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	○学校説明会やまち懇の場において、学校経営方針の説明や学校評価の報告を行うとともに、改善点についての理解を求めた。○地域行事に積極的に参加し交流を深めた。○ホームページの更新に努め、継続的に情報を発信して、学校への理解を深めた。	B
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。	○学校いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有、組織的対応を図った。○研修を通じ、いじめに対する知識を深めた。○YPAアセスメントシートを活用し、児童の実態把握に努めた。子どもの実態や変容を密に読み取ることが必要だと感じられた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、板書や発問等の指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	○メンターチームによる特別活動や道徳、外国語の授業づくりなどについての研修が有意義であった。○教務会をほぼ毎週開催し、計画的な学校運営に努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。	B
ブロック内評価後の気づき	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳について話し合う機会ができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。	○児童生徒指導・人権教育・特別活動・特別の教科「道徳」に視点を当て、「自己肯定感を高めるための取り組み」について話し合う機会を設け、ブロック内で共有した。○今年度は授業交流ができなかったが、生活・学習意識調査を実施し、教科毎に考察を行った。次年度以降の授業交流に役立て、併せて「9年間で育てる8つの力」の獲得に生かした。○専任協議会を中心とした南区一斉の取り組みとして、ネット社会とのつき合い方について標語応募や投票を行った。各校での深化にむけてブロック子ども会議で検討し、次年度へつなげる。	B
学校関係者評価	◇学校評価アンケートから、他の取り組みと比べると「進んであいさつ」「よさを認める」について自信をもたないようである。まちの大人から進んで声をかけていくことで、風通しのよい関係を築きたい。◇未就学児からシニアまでが、まちの行事を通じて「つながる」ことができている。関係団体との「つながり」により拡大してきた行事も多く、プラレール大会などでは寄付によって子から子へ物を大切に「つなぐ」ことができている。六つ川台のまちのよさに改めて気づく。	◇学びの楽しさを感じることができている児童が多いため、読書活動や家庭学習などへの継続的な取り組みを推進し、学びの習慣づくりにつなげたい。◇あいさつやルールについて、児童の意識と保護者や教職員の評価に差が見える。周囲の大人が示範し、礼儀やマナーを重んじることができると子ども達を育てたい。◇他者にも大切にしたい気持ちを一層育むため、温かい言語環境づくりに取り組む。互いに認め合い、支え合う経験を通じ、自己肯定感を高めるとともに、一人一人のよさを豊かにしていきたい。	B
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みを一段階引き上げ、ともに考え「行動する」姿を追求してきたい。○ペア学年を生かした取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。人権意識向上の手立てが求められる。○制限下にあっても、運動に親しむ姿が多く見られる。技能面(特に敏捷性・巧緻性)を高めたい。○配慮を要する児童への支援が充実してきた。職員間のスタンダードの共通理解を進めたい。	B

重点取組分野	令和2年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①スキル学習の充実を図り、語感を高め、基礎基本の定着を目指すとともに、一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにする。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」の獲得を目指し、算数科の授業を柱に研究を推進する。	○基礎・基本の定着に向けてスキルタイム学習を進めた。自己確認表で成果の視覚化を図った。○「自ら学びともに考え行動する」台小の子育てに向け、成長過程における具体的獲得を目指し、算数科での自力解決場面を柱に検証することができた。	B
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ運動を通して、気持ちのよい挨拶や、礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心をもつ子を育成する。③人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。	○児童のアンケート結果から、引き続き自己肯定感を一層高める指導の充実が求められる。○ディスタンスに配慮し、あいさつ放送を継続した。進んであいさつできる児童の割合は十分と言えない。○人権週間や子ども会議等の活動を通して意識の向上に努めた。上学年ほど人権への配慮に欠ける表現が気になる。	B
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を通じて、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会での清掃についての活動を通して、生活環境に対する関心を高め、清潔な環境で生活するよさを実感できる子の育成を図る。	○体カアッププロジェクトでの長編1000回チャレンジが5年目を迎え、冬季に運動に親しむ環境ができた。コロナ禍での環境づくりが課題である。○コロナ禍で、手洗いに関する関心は非常に高かった。マスクはほぼ徹底できたが、ハンカチの携行や距離の確保は課題が残った。	B
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、校内支援体制を整え、配慮の必要な児童に対する共通理解を図る。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。	○コーディネーターを中心に校内研修を行った。また児童の困り感について共通理解を図るとともに、関係機関と連携し指導に生かした。取り出し指導の充実を図った。適時ケース会議を実施し、目標修正を図った。○板書の統一など、学習環境のユニバーサルデザイン化に努めた。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。	○日常的に児童の実態把握に努めた。家庭訪問や個人面談を通して保護者への理解を求めるとともに、学年末にスタンダードの加筆・修正を全職員で行った。テレビ朝会や昼の放送を活用して指導の全体化を図った。○児童理解委員会を毎月開催し、児童間の問題や気になる児童についての情報を共有した。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	○学校説明会やまち懇の場において、学校経営方針の説明や学校評価の報告を行うとともに、改善点についての理解を求めた。○今年度は感染症拡大防止の観点から、地域行事の実施が難しかった。○学校と家庭との連携を図ることをねらい、ホームページ更新およびメール配信充実にも努めた。	B
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。	○学校いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有、組織的対応を図った。○研修を通じ、いじめに対する知識を深めた。○YPAアセスメントシートを活用し、児童の実態把握に努めた。いじめアンケートをグラフ化し、比較できるようにしたこと、学級風土のチェックにつながった。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、板書や発問等の指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	○メンターチーム主導による授業を伴う研修が有意義であった。○教務会をほぼ毎週開催し、計画的な学校運営に努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。	B
ブロック内評価後の気づき	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳について話し合う機会ができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。	○児童生徒指導・人権教育・特別活動・特別の教科「道徳」に視点を当て、「自己肯定感を高めるための取り組み」について話し合う機会を設け、ブロック内で共有した。○今年度は授業交流ができなかったが、生活・学習意識調査を実施し、教科毎に考察を行った。次年度以降の授業交流に役立て、併せて「9年間で育てる8つの力」の獲得に生かした。○専任協議会を中心とした南区一斉の取り組みとして、ネット社会とのつき合い方について標語応募や投票を行った。各校での深化にむけてブロック子ども会議で検討し、次年度へつなげる。	B
学校関係者評価	◇学校評価アンケートから、他の取り組みと比べると「進んであいさつ」「よさを認める」について自信をもたないようである。まちの大人から進んで声をかけていくことで、風通しのよい関係を築きたい。◇未就学児からシニアまでが、まちの行事を通じて「つながる」ことができている。関係団体との「つながり」により拡大してきた行事も多く、プラレール大会などでは寄付によって子から子へ物を大切に「つなぐ」ことができている。六つ川台のまちのよさに改めて気づく。	◇学びの楽しさを感じることができている児童が多いため、読書活動や家庭学習などへの継続的な取り組みを推進し、学びの習慣づくりにつなげたい。◇あいさつやルールについて、児童の意識と保護者や教職員の評価に差が見える。周囲の大人が示範し、礼儀やマナーを重んじることができると子ども達を育てたい。◇他者にも大切にしたい気持ちを一層育むため、温かい言語環境づくりに取り組む。互いに認め合い、支え合う経験を通じ、自己肯定感を高めるとともに、一人一人のよさを豊かにしていきたい。	B
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みを一段階引き上げ、ともに考え「行動する」姿を追求してきたい。○ペア学年を生かした取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。人権意識向上の手立てが求められる。○制限下にあっても、運動に親しむ姿が多く見られる。技能面(特に敏捷性・巧緻性)を高めたい。○配慮を要する児童への支援が充実してきた。職員間のスタンダードの共通理解を進めたい。	B

重点取組分野	令和3年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①スキル学習の充実を図り、語感を高め、基礎基本の定着を目指すとともに、一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにする。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」の獲得を目指し、算数科の授業を柱に「ともに考える」研究を推進する。	○スキルタイムを継続的に実施し、学習事項の基礎・基本の定着が図れた。○算数科の授業を柱に共同思考を視点として研究を進め、協働的に学び方を身に付けていくことができ、他教科においても協働的に学びを進めていくことができた。	B
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ活動やあせかけ運動を通して、気持ちのよい挨拶や礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心をもつ子を育成する。③人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。	○道徳や特別活動等を通じ、互いによさを認め合う姿勢や自己肯定感の向上が図られた。挨拶も進んでいく意識も高まっている。○代表委員会や人権委員会が主体となった横浜子ども会議や人権週間の取組等を通して人権意識が高まった。	B
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を通じて、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会でのけがの予防についての活動を通して、環境と行動について関心を高め、安全に生活するよさを実感できる子の育成を図る。	○運動委員会主催のなわとび月間の取組を通じ、体力向上に向けた運動機会を増やすことができた。○年間2回学校保健委員会を実施し、けが防止の意識が高まり、各クラスで日々の学校生活でのけが防止の実践につなげられた。	B
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対する共通理解を進めるとともに、特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。	○校内委員会、校内研修の実施により、配慮を要する児童についての共通理解を深めることができた。また、特別支援員やボランティアの活用を進めて校内体制を整え、個々の状況に応じた支援ができた。○環境整備に関して共通理解が図られた。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。	○児童理解委員会を中心に、指導の在り方やスタンダードを見直し、指導の方向性を確認した。また、各学年の児童の様子について全体で情報を共有する機会を定期的に設定することにより、指導の方向性を職員間でそろえ、組織的な指導、対応を進めていくことができた。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	○学校運営協議会やまち懇を紙面開催し、学校やブロックでの取組について共有できた。○地域行事に代わり、社会科や総合的な学習の時間等で地域と関わりが深まった。○行事ごとにホームページを更新して情報発信ができた。	B
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。	○いじめ防止対策委員会を毎月開催して組織的対応を図り、SOSの出し方教育等についても確認し、いじめに関する視野を広げた。○YPAアセスメントシートの分析やいじめアンケートの結果を学年や学校で共有し、いじめを見逃さない職員意識が高まった。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携、ビジネスチャットツールなど、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	○授業実践を伴うメンター研修を実施し、キャリアステージに応じて、授業改善につなげることができた。○業務改善について教務会や職員会議で話題にし、行事や業務の精選、外部委託や職員室アシスタント業務の見直し、職員作業の簡便化・効率化を図り、業務改善を進めた。	B
ブロック内評価後の気づき	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳について話し合う機会ができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。	○教育活動推進・児童生徒指導、地域連携の各部会で「自己肯定感の向上」を共通テーマとして設定し取り組んだ。教育活動推進部会では、「自己肯定感を高めるための「主体性」「発信力」「傾聴力」を育む教育活動への手立て」を各校の重点研究会と関連付けて実践を進めた。児童生徒指導部会、地域連携部会では、他者との関わりのある活動や地域交流について制限があり、実践が難しい面があったが、各校のスタンダードについての情報共有したり、人材バンクの構築について意見交換をしたりするなど、次年度の取組につなげている。	B
学校関係者評価	◇教育活動の制限がある中、地域や他者との関わりが希薄になってしまっているが、授業参観や運動会、修学旅行などの行事を可能な範囲で実施していることが、子どもの学校生活への意欲の向上や学習意欲の向上に寄与していると考えられる。ボランティアによる学習支援や消毒作業など、コロナ感染症対策を丁寧に進めながら、地域と連携して教育活動の充実を図る取組が進められている。◇保護者、児童、職員アンケート結果を丁寧に分析し、保護者や地域に報告することにより、学校の取組について理解を得られるようにしている。	◇教育活動の制限がある中、地域や他者との関わりが希薄になってしまっているが、授業参観や運動会、修学旅行などの行事を可能な範囲で実施していることが、子どもの学校生活への意欲の向上や学習意欲の向上に寄与していると考えられる。ボランティアによる学習支援や消毒作業など、コロナ感染症対策を丁寧に進めながら、地域と連携して教育活動の充実を図る取組が進められている。◇保護者、児童、職員アンケート結果を丁寧に分析し、保護者や地域に報告することにより、学校の取組について理解を得られるようにしている。	B
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。	○学校教育目標や育成を目指す資質・能力を明確にし、カリキュラム・マネジメントの視点から学校運営、教育活動の充実を図るという意識が教職員に定着してきており、次年度以降につなげたい。○協働的な学びに焦点化し、他者と関わり合いながら学びを進めていく学び方が身に付けられつつあり、特別活動や学校行事などでも協力的に活動を進める姿があった。協働的な学びや活動により、互いに認め合う意識も高まってきており、学校教育目標の具現化につながっていると考えられる。○学校評価に関して共通理解を図り、評価を学校運営の改善につなげることが今後の課題である。	B